

フジェイラ首長国のイスラーム時代遺跡踏査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 達夫, 佐々木, 花江 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2984

金大考古 52, April 2006, 6-15. フジェイラ首長国のイスラーム時代遺跡踏査：佐々木達夫・佐々木花江

フジェイラ首長国の イスラーム時代遺跡踏査

佐々木達夫・佐々木花江

1987年以來ペルシア湾岸のジュルファール遺跡、ハレイラ遺跡、ジュメイラ遺跡、アーリ遺跡などで、海上貿易史研究のためイスラーム時代遺跡を発掘した。比較研究のため1994年から近接するオマーン湾岸のルリーヤ砦遺跡、コールファッカン砦遺跡、コールファッカン町跡、フジェイラ町跡、コールカルバ町跡を発掘し、ビスナ町跡、オワラ町跡、ディバ町跡等で出土品や採集品を整理した。そうした遺跡調査研究の成果や出土品を使用した場所である町や家の構造と配置、特に港町に焦点をあてた研究成果を2005年春

に刊行した（佐々木 2005）。本稿はその後2005年5月に実施した同地域におけるイスラーム時代遺跡踏査の報告である。

アラブ首長国連邦フジェイラ首長国内のイスラーム時代町村跡では居住用の小さな家跡と比べると、砦や塔は地上に盛り上がり目立つ遺構である。フジェイラ、ディバ、マサフィ、ビスナには砦及び塔が残るが、ディバとマサフィの塔は泥レンガ積みで既に壊れた部分が多く泥の小山となる。大きな砦は修復されたが、小さな砦や塔は筆者が1987年当時に見ていたより破壊が進行していた。

山の尾根上やワディに沿って石積み塔が今でも多数残る。廃墟となった家跡もワディ沿いに数軒がまつまって残り、山裾にも家跡が数軒単位で見られる。家跡は小さな一部屋の家で、石積み壁の場合は壁の下部が地表面に見えるが、泥レンガ家の場合は壁の存在が見えない状態になっている。家壁材料はそれぞれの地

域に豊富にある泥または石を用い、海岸地帯では泥レンガ、丘陵地帯では割れ石を積み上げて家壁とする。いずれの地域も家平面形は長方形であり、壁高さと屋根構造は同じであると推定できる。

地域ごとの代表的な歴史遺産は保存・保護する必要がある。地域の歴史遺産を調査研究し保護するには、衛星写真を利用して家跡群の分布地図を作製することや、年代や構造を知るためのトレンチ発掘調査が緊急の課題である。すでに古い家跡の多くは破壊され消滅したようであり、残存する家跡や砦跡の一部を保存することも必要であろう。

ディバ Dibba (N25° 35' 50", E56° 16' 47")

ディバにはオマーン、シャルジャ、フジエイラのそれぞれの領地に砦が残る。フジエイラ首長国ではディバ海岸地域に広がるナツメヤシ農園と住居地域の境目にディバ砦が残る。平坦地に泥レンガで築かれた崩れた塔が残り、周辺は泥の小山となる。北緯 25.35_50, 東経 56.16_47 に塔があり、塔部分の平面形は長方形である。塔も崩れ落ちているが、その他の遺構はすべて泥の山となっている。家跡も不明瞭である。周囲には古い家並みと農園が広がる。18～19世紀のコールカルバと同じ時代の陶器片が表採された。

アル・ハラ Al Halah (N25° 26' 57", E56° 09' 56")

アル・ハラはマサフィとディバの間に位置し、狭いワディを遡ると数軒の石積み家跡がところどころに残る。ワディ内部の崖下緩い斜面に残る家を撮影する。北緯 25° 26' 57", 東経 56° 09' 56" に家跡がある。いずれも狭い1部屋の家で、2つの立て石の間が出入り口となる。室内壁に棚が2つ並ぶ家が1軒あるが、他の家は棚がない。棚は石積み壁の石を抜いた状態である。現在は廃墟となる。

サラール Salah (N25° 24' 46", E56° 10' 01")

サラールはタイーバ Tayyibah から西方に狭いワジ・サーラを遡った山の中に残る石積み家跡群である。ディバに抜けることが可能な道に沿うが、細く険しい

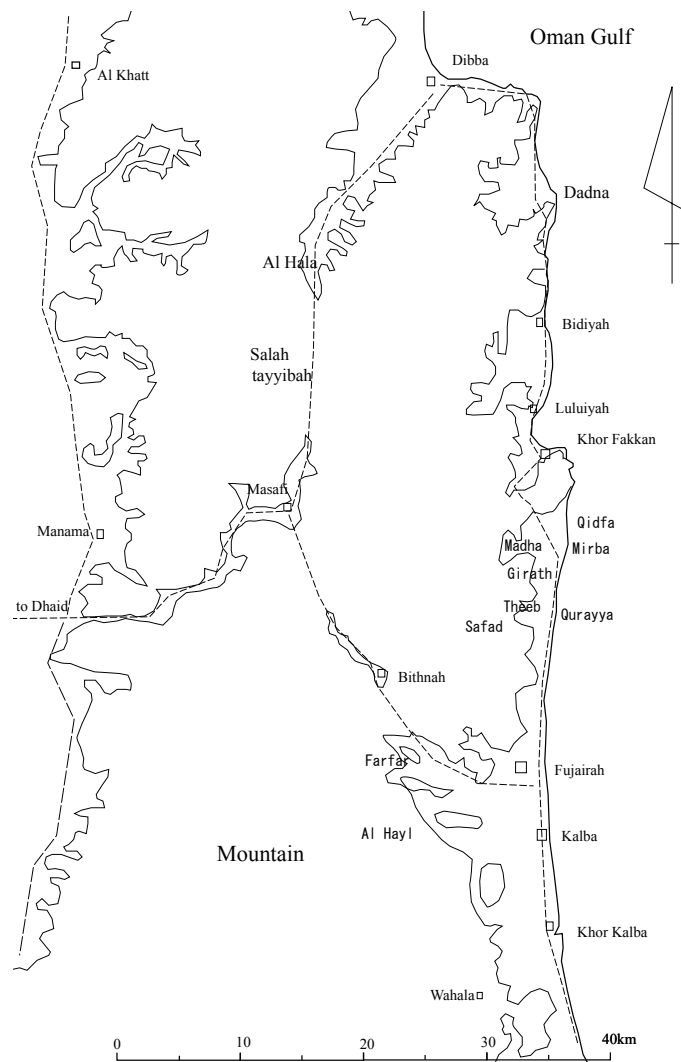


Figure 1 Location of the Islamic town sites in Fujairah Emirate and Oman.

ため車は通れない。地域開発はまったくなく、孤立しているために家跡の保存がきわめて良い。北緯 25° 24' 46", 東経 56° 10' 01" を中心に家跡が点在する。いずれも狭い1部屋の家で、平面形は方形、長方形、楕円形、円形などさまざまな形態があることが特徴である。起伏に富んだ谷際と山上の両方に家が建てられている。ワディには農園がある。現在は廃墟となる。現地に居住していた Abudulla Ahmad Said (P.O.Box 11028 Masafi, Fujairah, 050-484-3919) が案内してくれた。

マサフィ砦 Masafi Fort (N25° 17' 48"-51", E56° 09' 21"-20")

北緯 25° 17' 55", 東経 56° 09' 31" に農園際に建つ泥レンガ積みの大きな家が廃墟となって残る。ナツメヤ



Dibba Fort



Masafi



Masafi Fort



Masafi Fort



Qurayya Fort



Figure 2 Fort of Fujairah Emirate.

シ農園と住宅地域の境目に泥レンガ積みの砦がある。北緯 25° 17' 48" -51", 東経 56° 09' 21-20" に厚く堆積した泥山があり、塔部分のみ泥レンガ積みの状態がみえる。塔は円形であるが、崩れたため 3本の柱が建つようにみえる。泥山で 18～19 世紀の中国染付片や青釉彩文陶器を採集した。農園を越えた北方向に小丘があり、その頂上に石積み塔が見える。

ファルファル Farfar

ビスナから直線で南方 4km ほどの位置にある町跡である。しかし、現在も山越道路はなく、以前もビスナとフジエイラを結ぶワディハムに沿う道の間部から西方にワディを遡る道を利用したのであろう。ファルファル村はワディファルファルとワディサハム Saham が合流する地点にあり、ワディハムの支流となる。

アル・ヘイル Al Hayl (N23° 04' 48", E56° 13' 22")

アル・ヘイルはワディヘイル Hayl にある山間の町跡である。現在のアル・ヘイル町は下流側に移り、少し上流にあった町は一時廃墟となったが、フジエイラ政府によって大きな家を中心に修復されている。宮殿、方形塔などの修復が完了している。ワディ段丘上に家跡が広がり、Palace(N23° 04' 48", E56° 13' 22"), watch tower on the hill top (N25° 04' 44", E56° 13' 19") 周囲の斜面に石積み壁の家跡が広がる。ワディ内を中心にナツメヤシ畑や野菜畑が広がる。ワディを隔てた反対側の山上にも見張り塔の痕跡が見える。数片の施釉陶器と、細かく割れた土器片が落ちている。18～19 世紀の中国染付鉢片、緑色で彩色されたコールカルバと同様の陶器片が、それぞれ 1 片ずつあった。

ワディヘイルは東方に流れ、ワディハムが形成するフジエイラの扇形扇状地の中央部に至る。ワディの急峻な谷部を遡るとやや広くなった谷部を見下ろす地点に町跡がある。

キドファ Qidfa

キドファはコールファッカン南山裾に位置する。北緯 25° 17' 47", 東経 56° 21' 51" の第 1 地点には 1975 年にイラク隊が発掘した石積み基礎家跡が残り、近くの小丘上に塔が見える。完形の出土品はフジエイラ博物館に展示されている。第 2 地点は海水淡水化工場と水パイプライン設置に伴う試掘が行われた平坦地

である。第 3 地点は北緯 25° 18' 20", 東経 56° 21' 42" の丘上の石積み基礎の塔跡である。

キドファ砦はすでに撤去されて残らない。モスクと砦を撤去して新たに大きなモスクを建設した。砦の位置は町中のモスクの位置で、北緯 25° 17' 27", 東経 56° 21' 17" である。

マドハ Madha, oman

キドファ南の海岸の町ミルバ Mirba に流れるワジ・マドハを遡ると、山越えてマサフィとビスナの間に出る。マドハは現在オマーン領である。地元の古物愛好家 Mohammed bin Salim がマドハで採集した陶磁器片を見学した。13 世紀の緑釉刻線文陶器鉢、黄釉刻線文陶器、14 世紀の中国青磁碗、14～15 世紀のイラン緑釉陶器鉢、15 世紀のミャンマー青磁盤、16 世紀のミャンマー白濁釉陶器盤、18～19 世紀の中国染付鉢、16 世紀以降のイスラーム陶器、及び土器片が採集されている。マドハ出土のイスラーム時代陶器及び東南アジアや中国の陶磁器については別稿で写真を紹介する。

マドハにはコールファッカン及びキドファから人が集まるが、マドハよりワディを遡った山に住む人々は自給自足生活を送り海岸の町と交流が少なかったという。

グラット Girathth (N25° 15' 10", E56° 25' 56")

グラットには平坦地に接する小丘上に石積み基礎が残り、イスラーム時代の陶磁器片が採集された家跡である。丘下で北緯 25° 15' 10" 東経 56° 25' 56" であり、丘は東側にある。

シーブ Theeb

シーブ町も旧町が廃墟となり、住民は新町に移住した。旧町にはまだ家の天井や壁が残る部分があり、夏用の家も当時の面影を残している。

コリヤ Qurayya Fort (N25° 14' 05", E56° 21' 03")

コリヤには砦が残る。円形塔と家跡は北緯 25° 14' 05", 東経 56° 21' 03" に位置する。

ワジ・サファド Wadi Safad

ワジ・サファドの谷を見下ろす丘上に石積み基礎の



Qidfa. Iraqi archaeological team had excavation in 1975. They found stone walled house or mosque and pottery after 16th century.



Qidfa



Qidfa



Girath
Figure 3 Qidfa and Girath.



Wadi Safad



Al Hala



Al Hala



Figure 4 Wadi Safad,, Al Hala and Salah.

Salah



Wadi Farfar



Wadi Farfar



Wadi Saham



Wadi Saham

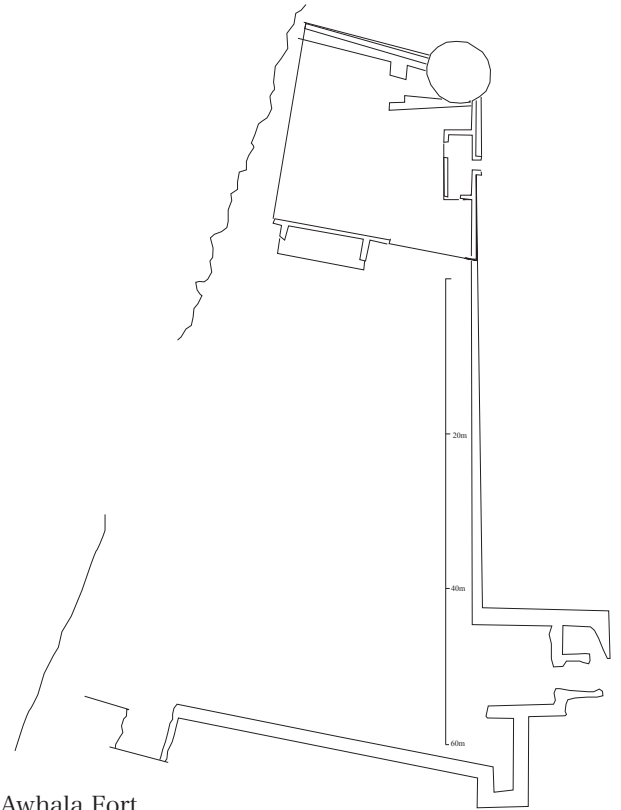


Iron age tomb in Wadi Saham

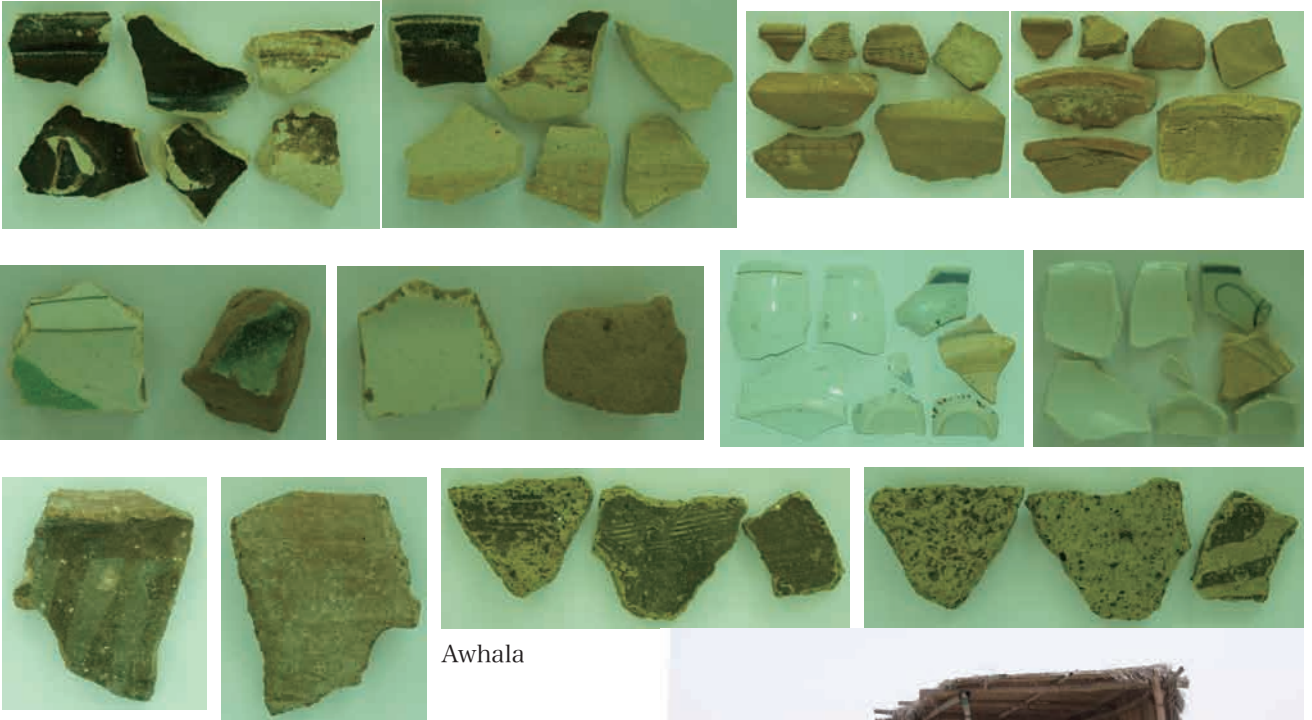
Figure 5 Wadi Farfar and Wadi Saham.



Awhala, 2004.



Awhala Fort.



Awhala



Theeb

Figure 6 Awhala and Theeb.



Al Hayl.



Al Hayl palace



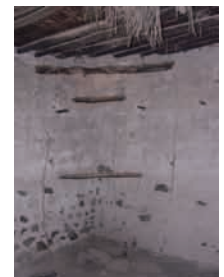
Majris outside of Al Hayl palace



Houses.



Houses.



Stairs inside tower.



Hearth inside tower.



Madbassa inside tower.



Al Hayl tower



Watch tower, seen from Al Hayl tower.

Figure 7 Al Hayl.

塔跡や家跡が残る。

ビスナ Bithnah (N25° 10' 59" , E56° 14' 03")

ビスナ Bithnah は海岸の町フジェイラ Fujairah から北西 13km のハジャル山脈内にあり、フジェイラと山脈内の町マサフィ Masafi を結ぶ山脈内道路の中間に位置する。ビスナは古い Fort が残り、町も古い時代から続いていることが推測できる町であった。筆者の 1987 年踏査で砦周辺の地表面にイスラーム陶器片が落ちていることを確認していた。砦は北緯 25° 10' 59" , 東経 56° 14' 03" であり、今の町とワディハムを隔てた反対側にある。砦はワディ際段丘上に築かれ、周囲に泥レンガの家跡もわずかに残るが、墓もあり、起伏のある地形で高い山並麓に続いている。山麓には塔などの遺構は見えない。現在の地勢からみると、イスラーム時代町跡も現在の町側にあったと推定できる。

Ann Benoist (French archaeological Mission in the U.A.E., CNRS) が実施したイスラーム時代以前のビスナ遺跡発掘が 2001 年と 2003 年の春に行われ、発掘目的である鉄器時代 II 期の土器と共にイスラーム陶器片も出土した。Ann Benoist 及び Ahmed Al-Shamsi, Salah Ali Hassan (フジェイラ博物館) の許可のもとに、2003 年 8 月出土品の観察撮影をフジェイラ博物館で行った。

P. Corboud (Swiss-Liechtenstein foundation for archaeological research abroad) はビスナ及び付近の遺跡踏査と発掘を 1987 年から 1994 年に実施した。筆者は表面採集土器等をフジェイラ博物館でスイス人が整理中に観察したが、その中にイスラーム陶器は含まれていなかった。今回のビスナ出土イスラーム時代陶器は、筆者が行ったアラブ首長国連邦オマーン湾岸に沿う 1994 年イスラーム時代遺跡踏査の資料、及びその後のルリーヤ砦、コールファッカン砦、コールカルバ町跡発掘資料と比較すると、山間地域の特徴を知る資料となる。

ビスナ出土のイスラーム時代陶器については別稿で写真を紹介する。

オワラ Awhala (Wahala, Ohala)

フジェイラ首長国最南部の山麓部ワディに沿う、海岸から 10km ほど離れた町である。コールカルバの西南にあたり、現在はオマーン国境に近い山間の町であ

る。オワラではすでにオーストラリア [Potts 1996] とフランス [Petrie 1998] の調査隊が鉄器時代の遺跡調査を実施している。ワディ段丘上にある壊れかけた砦をフジェイラ首長国博物館が修復中である。20 世紀まで使用されていた砦平面図を示す。Fort の周囲に鉄器時代の石積み壁が地表面に見える。石積み壁家跡も地表面に見える。ビスナで地表面に見える石壁家と同じ構造である。鉄器時代から最近の家まで同じ面に壁部分が見えるため、発掘して壁の年代を決定する必要がある。

砦及びその周辺で最近のゴミからいくつかの陶磁器を採集する。2003 年 8 月の採集品。いずれも地表面に落ちていた陶磁器を選別して採集した。新しい時代のものである。磁器。白磁コーヒーカップ、金色彩で椰子木が描かれる、20 世紀。白磁コーヒーカップ、青色彩と赤色彩がある、20 世紀。白磁皿、20 世紀。染付鉢、手描きで草花文、20 世紀か。染付、内面蛇の目釉剥ぎ、高台下部無釉、19-20 世紀。磁器はいずれも中国製か。白濁釉上緑色黒色彩文皿、20 世紀、ヨーロッパ製か。淡緑釉下青黒色彩陶器鉢、淡紅色素地。土器壺、外面器表面はスリップで黒色、内面はスリップなし、外面黒色スリップ上に赤黒色彩文、口縁部は横方向に塗り、口縁下方は斜め線を描く、砂粒混じり赤色素地、一部は黒色素地となる。土器刻線文瓶。1 片のみ灰白色スリップ上に刻線文、紅色素地。5 片はスリップなし、紅色素地。1 片はスリップなし、黄色素地。小片だが、点列文と波状文、点列文が見える。土器大瓶、黒色大砂粒混じり黄色素地、外面器表面は刻線文上に黒色スリップ、内面はスリップなし。

文献

Petrie, C., 1998, The Iron Age fortification of Husn Awhala (Fujairah, U.A.E.), *Arabian archaeology and epigraphy*, 9:246-260.

Potts, D.T., Weeks, L., Magee, P., Thomson, E., Smart, P., 1996, Husn Awhala: A late prehistoric settlement in southern Fujairah, *Arabian archaeology and epigraphy*, 7:214-239.

佐々木達夫, 2005 「アラブ首長国連邦オマーン湾岸のイスラーム時代町跡」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』25:39-192.